

2025 年度数理・データサイエンス・AI 教育プログラム
自己点検・評価について

1. プログラムの履修・修得状況

本プログラムは基盤教育科目（選択科目）として、2022 年度以降入学生を対象に全学に開講している。2025 年度の履修・修得状況は以下のとおりである。

<履修対象者のうちのプログラム履修・修得状況>

学部・学科	履修対象者数	履修者数	修了者数
リベラルアーツ学部	543 名	13 名 (8 名)	11 名 (8 名)
人間科学部心理学科 総合心理学部総合心理学科	526 名	16 名 (13 名)	14 名 (11 名)
人間科学部食物栄養学科（健康実践栄養士課程） 食環境学部食イノベーション学科	415 名	1 名	0 名
人間科学部食物栄養学科（管理栄養士課程） 食環境学部管理栄養学科		12 名 (2 名)	10 名 (1 名)
2025 年度 計	1484 名	42 名 (23 名)	35 名 (20 名)

※履修対象者数：1・2・3 回生のうち「データサイエンス・AI 概論」を 2024 年度までに修得した学生を除いた人数

※履修者数・修了者数のうち、（ ）内は 1 回生の人数

プログラム終了時に行った授業アンケート（別紙参照）では、「総合的に判断してこの授業に満足しましたか」という設問に対して約 94%の学生が肯定的な回答をしており、おおむね高評価を受けたと考えられる。プログラムの履修・修得状況および授業アンケートの結果は教務・カリキュラム WG に報告がなされ、ワーキングを通して各学科に共有されている。

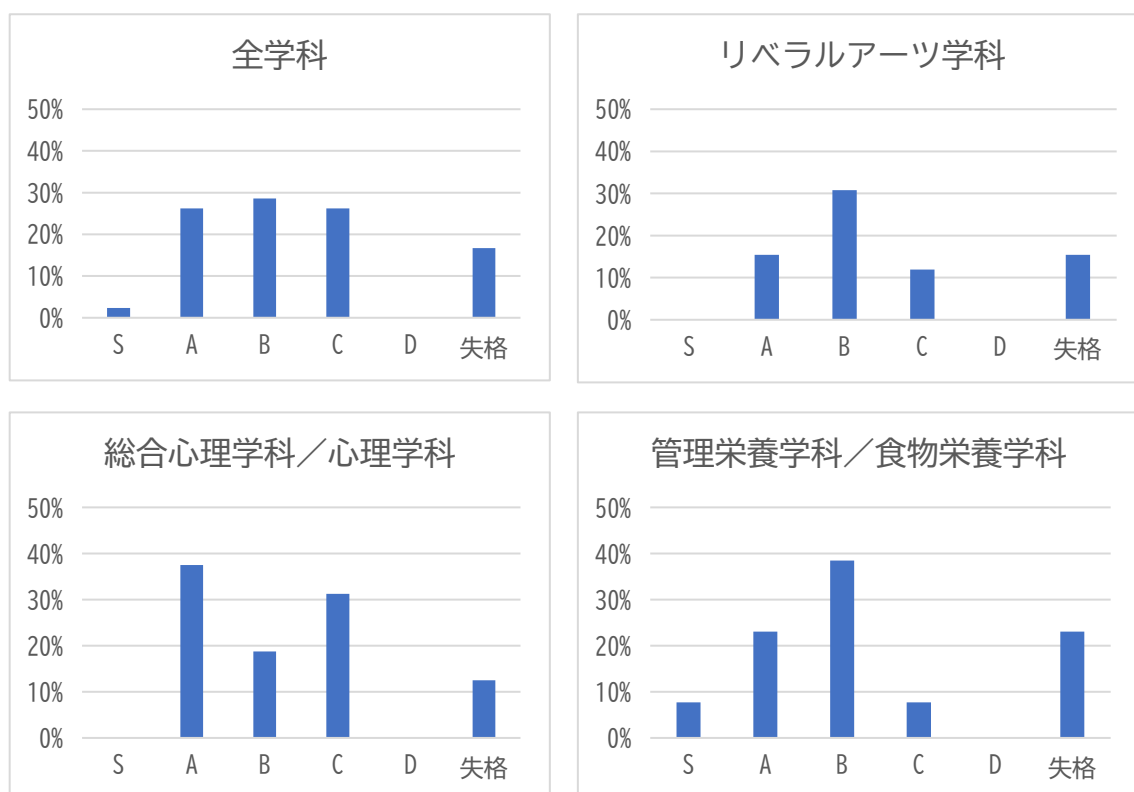
2. 学修成果

全 14 回の授業毎に実施するミニレポートにより、毎回の授業における学生の学修成果の振り返りを確認している。プログラムの終盤では、学んだ内容をもとに課題を設定し、解決策をまとめて成果発表するグループワークを実施するとともに、最終回には LMS を活用したオンライン上の到達度の確認を行い、学修成果を確認している。

また、カリキュラム運営 WG において、プログラムの単位修得率、成績分布の状況を共有し、学修成果の評価と今後に向けた改善方を検討している。

<2025 年度「データサイエンス・AI 概論」成績分布>

評価	人数	割合
S	1	2%
A	11	26%
B	12	29%
C	11	26%
D	0	0%
失格	7	17%
合計	42	100%



3. 学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度

プログラム終了時には、履修者全員を対象とした授業アンケートを実施し、その結果を授業担当者、教務・カリキュラム WG、教務・学生委員会で共有し、授業改善につなげている。さらに、2024 年度以降は本学のアセスメントプランの項目にも組み込み、全学的な PDCA サイクルの中で継続的なプログラムの改善を推進している。

また、プログラムの進捗に応じて、学期ごとに実施している授業受講に関する学生アンケートや卒業時調査、卒業後調査等を活用し、学生のニーズをふまえたプログラムの改善にも取り組んでいく。

4. 学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度

授業アンケートには他の学生への推奨度を直接問う設問は設定されていないものの、授業アンケートの結果では約 94% の学生が本プログラムに対して高い満足度を示しており、一定の評価を得ているものと考えられる。2026 年度のガイダンスでは、履修推奨科目として、本プログラムの概要に加えて実際にプログラムを修了した学生の声を紹介し、履修登録の推進を図った。

5. 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況

毎年 1% ずつの履修率増加を目指しており、履修者数の推移は以下のとおりである。

<「データサイエンス・AI 概論」履修者数の推移>

年度	収容定員	履修者数	履修率
2022 年度	1,560 名	61 名	3.9%
2023 年度	1,480 名	54 名	3.6%
2024 年度	1,480 名	42 名	2.8%

2025 年度	1,480 名	42 名	2.8%
2026 年度目標	1,480 名	60 名	4.1%

本プログラムが1回生配当科目である点を踏まえ、大学案内での周知に加えて各学期のガイダンスにおいて、各学科の専門性との接続をふまえながら、活発な広報活動を展開し、履修率の向上を目指す。2026年度においては、履修者数60名を目標とする。

6. 教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価

本プログラムは2022年度に開始され、このたび初めて卒業生を送り出すに至った。今後は卒業生アンケート等を通じて、プログラムの評価を実施していく予定である。

7. 産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見

大学の自己点検・評価および認証評価による評価の機会、また、AI事業を展開している企業との意見交換を通して、本プログラムの改善に反映させていく。企業との意見交換では、具体的に以下の意見が得られた。

①プログラム全体への意見

短時間の講義ではあるが、非常に密度の高い内容であったとの印象を受けた。各時限にグループワークを導入してアウトプットの機会を多く設定し、ミニアンケートを実施することで、疑問を残さず進めることができたことが大きな要因と推察される。

また、これまでの講義と異なり企業の実データを用いての講義を導入したことで、より実践的な能力を身につけられたのではないと思われる。本プログラムは今後社会で必要なAIに関する知識を習得できる内容のため、多くの学生が受講すべきものであると考える。

②今後の改善点

講義全体としては非常に密度の高いものとなったが、実データの活用に関しては、やや深まりにかけ印象が残った。昨年度の反省を活かしグループワークを多く導入したが、結果として後半駆け足になってしまったためと推察する。1つのテーマを深掘り実施することで、より実践的な能力の習得につながると考える。

さらに、このところのAIの発展は目覚ましく、現在導入している教科書の内容では現状に合わなくなっている可能性が高い。したがって、教育内容の質を担保するためにも、教科書の再選定を行う必要があると考える。

8. 数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させる工夫

各人の専攻に関わらず、データサイエンス・AIに関する基本知識を持っていることが、これからの社会を生き抜く上で不可欠になるため、その基礎を身につけ、実社会で実践できるようになることを本プログラムの目的としている。

また、本プログラムでは、身近にある様々なデータを実際に扱うことで、学び始めたばかりの学生にも親しみやすく興味を持たせる工夫をしている。また、生成AIを適切に利用する方法について学生が主体的に考えられるように演習内容を組み立てている。グループワークや個別のワークを通して最新の技術を体験しながら学び、成果発表までを能動的に行うことで、学生の知的好奇心と達成感を高めるよう工夫している。

2025年度は、最新の生成AI（Gemini等）を活用した実践的なAI使用マニュアルを毎回導入し

た。学生からは「AI のおもしろい使い方を知れた」「今後の社会で必要になる知識を学べた」等の声が寄せられ、アクティブラーニングを通じた知的好奇心の喚起に成功している。

9. 内容・水準を維持・向上しつつ、より「わかりやすい」授業とする工夫

授業アンケートや各種評価、企業との意見交換、授業公開等を通じて、学生の理解を促す授業の改善に向けた検討を行っている。また、本学のアセスメントプランの項目に組み込まれており、全学的な内部質保証システムに基づき、自己点検・評価を継続的に実施する。

2025 年度の授業アンケートで課題となった「AI 実演時のエラーによる時間ロス」や「専門用語の難解さ」を受け、次年度以降は事前収録したデモ動画との併用など、文系学生向けの用語解説スライドの拡充を図る。また、授業内の質疑応答の時間を明示的に確保し、学生の理解度を都度確認しながら進める双方向性の高い授業デザインへと改善する。

以上